

岩倉紙芝居 古典館 宰主 上田啓之

伊奘諾尊 伊奘冉尊

伊奘諾尊 (いざなぎのみこと) 伊奘冉尊 (いざなみのみこと) は地 (くに) 造りの役割をになって現れる男女の尊 (みこと) である。古事記と日本書紀ではいささかも、その見方が異なる。日本書紀によってその姿をみてみたい。

一般に、“いざな”は“いざなふ”、誘うこと、“ぎ”は男、“み”は女をあらわす接尾語とされる。“み”は尊称、“こと”は言であり事である。声にして発すと、“みことのり”となる。「貴きに至るを尊、その他を命と曰」と書紀に解説されている。

両尊に到る経緯は省き、天浮橋に立たれているところからはじめたい。(公式に天降る時には、天浮橋が必要とされるようだ。) 書紀では、伊奘諾尊 伊奘冉尊はいつも共に事をなされる。橋の下に“くに”がないだろうか? この場合のくには土地、洲のことである。伊奘諾尊は手に矛を 伊奘冉尊は手に玉をもち、矛で底下をさぐる。リグベードに、「上に衝動力あり、下に展開力あり」という句がある。矛が衝動力、玉が展開力、共に、矛と玉で“かきさぐる”とその振動と熱によるのであろうか、水が凝まり暗くて深い海となる。矛をあげると、先からたれる滴 (しずく) がどっと潮の流れをうみ、がらごとと自ら凝ったものが嶋 (おのごろじま) となる。つららのように固まり、“くに”の中の柱となる。この柱を伝って両尊は嶋におり、共に、“みとのまぐはひ”をして洲 (くに) 國 (つち) をつくりたいと思われた。

互いに“いざなう”尊である、柱を陽神 (をかみ) が左回りし、陰神 (めかみ) が右回りし、顔をあわせたとき、陰神が、思わず先に、「あなうれしゑや、うましをとこ (美少年) に遭へて」と声をあげる。陽神は喜ばず、「ますらを (男子) が先に唱へるのが理 (ことわり) であり、たわやめ (婦人) が先に唱へるは不祥 (さがなし)、改めるが宜 (よろ) し」と元に戻り、やりなおす。今度は陽神が「あなうれしゑや、うましをとめ (美少女) に遭へて」と唱え、「汝 (いまし) の身にあるのは何かと」尋ねると、陰神が「吾が身に一つ雌 (め) の元 (はじめ) となる処あり」と対 (こた) えられた。陽神は「吾もまた雄 (を) の元となる処あり、吾が身の元の処、汝の身の元の処と合さむと思う。」かくして、陰陽 (めを) “みとのまぐはひ”をはじめ、“をうとめ” (夫婦) となる。アダムとイブは林檎を食べると裸でいることを恥ずかしく思い前を隠すのであるが、ここでは、いい女だなあ、いい男だなあ、とすぐさま子づくりに励む。あっけらかんなものである。

時至りて、胞 (え) がまず生まれる。兄 (え) であるが衣にくるまれた未熟児で喜びえず淡路洲と名付た。淡とは緑の薄いこと、路は神の通う路であり、立ち寄りづらい洲の義となろう。初産は難しいものがある。大日本豊秋津洲、伊豫二名洲、筑紫洲、双子の億岐洲と佐度洲、越洲、大洲、吉備子洲

を産む。對馬嶋、壹岐嶋、及處處小嶋は潮の泡、水の泡が凝って成ったとされる。

次に、海、川、山、木の祖（おや）、草（かや）祖を生む。ここで両尊は共に議（はか）り、大八洲國、山川草木をすでに生み終えたので、天下（あめのした）之主者（きみたるもの）を生もうと相談し、共に、日神を生む。大日靈貴（おほひるめのむち）、天照大神（あまてらすおほみのかみ）と名づけた。その光麗しく、くにの内をすみずみまで照らすのを二神喜び、「吾が息（こ）多（さは）といえど、かく靈（くしび）異（あやし）兒、久しくこのくにに留めるは宜しからず。」とすみやかに天に送り、天上の事を授けられた。この時、天地はまだ相遠からず、天柱で天上におくり挙げた。次に月神、月読尊を生む。日に次ぐ光彩があると、日神に並んで治めさせるべしと、また、天に送った。次に蛭兒（ひるこ）を生む。三年大事に育てたが脚がたたづ、神が使う船（天磐櫂樟船（あまのいはくすぶね））に載せて、風の吹くままに放ち棄てる。ひるめに対するひるこであり、本来は日子（男日神）となるべき兒である。次に、素戔鳴尊（すさのをのみこと）を生む。この神、勇（いさみ）悍（たけし）安忍（いぶり）、常に哭（なく）泣（いさつる）ため、国内人民をして若死する多く、また、青山をして枯らしむ。伊奘諾尊伊奘冉尊は勅し、汝は無道であり宇宙に君臨すること不可とし、根の国（黄泉の国）に行かしめた。

古事記とはずいぶん異なっているでしょう。天照大神、月読尊、素戔鳴尊は黄泉の国から伊奘諾尊が帰って、禊を終え穢れがない状態で、眼、鼻から伊奘諾尊一人で生んでいる。書紀では、両尊が共に生んだとしている。

伊奘冉尊が死に至る経緯、黄泉の国での出来事について、書記は一書、一書の説を引用するのみで公式見解をだしてはいない。だが、書紀の前提にたつと下の解釈となる。

伊奘冉尊は火の神を生み、焼かれ死ぬ。この一兒のかわりに、愛はしい妹（妻）を失い、伊奘諾尊は枕辺にはらばい、脚辺にはらばい哭泣し流涕（かなしむ）。その涙から様々の神が生まれ、この兒（火神）を斬ると斬られた火、飛び散った火から、また、様々な神が生まれた。然る後、伊奘諾尊は伊奘冉尊を追い、黄泉に入り、追いつき並び共に語る。ところが、この遅れが原因で伊奘冉尊はすでに黄泉の食事をして黄泉の住民となり、穢れを受けていた。

穢れの現実を知った伊奘諾尊は、おののき、そこから逃れようとする。穢れた姿を見られた伊奘冉尊は辱められたと怒り、伊奘諾尊を追い引きとめようとする。追いかけてくる伊奘冉尊と伊奘諾尊は泉津平坂（黄泉との境）で対峙する。

伊奘冉尊は“事戸（ことど）を渡す”。それは妻の誓を絶つ宣言であった。あなたを愛しいといえ、汝の治める国の民、日に千の首を絞め殺す事になる。伊奘諾尊はこれにこたえて、あなたを愛しいといえ、日に千五百の頭を産む事になる、と申された。”えをとこ”、”えをとめ”といざないあつて洲を産んだ両尊のことばの意味が通じ合わなくなった。伊奘冉尊は伊奘諾尊を愛しいといえ、結果的に夫の民を殺すことになるという現実と直面し、妻の誓いを絶つ。この時も、女の決断の方がはやい。なんと哀れな顛末ではないか。火を“くに”に与えることによって、永遠の穢れを背負わされたのである。

岩倉紙芝居館

一方の伊弉諾尊は、穢れを持ち帰れないことを知り、穢れたと思う持ち物をことごとく捨て去る。それは、とりもなおさず、伊弉冉尊との関係をことごとく断ち切るものであった。最後に、筑紫の日向、小戸の橘の櫛原（あはきはら）の瀬で、身体の隅々に至って禊をせんと決して言葉を発する。それを言い行なえば、もう伊弉冉尊とつながるものはそがれ、永遠の訣別となる。八十枉津日神（穢れの神）を生み、その穢れを直す神直日神を生む。

結果、吾が子、素戔鳴尊が、勇悍安忍常哭泣、荒れ狂い、ぐずり、泣き叫んで母を求めることになる。どうしてやることも出来ない伊弉諾尊である。病が進んで衰弱甚だしくなった伊弉諾尊は、行きづらかったあの淡路、幽宮（かくれみや）にかくれる。父にさとされたのであろう、素戔鳴尊は母に会うために黄泉の国へ行く前に天照大神に別れをいうために天にのぼる。素戔鳴尊の苦しみは、父母を顧みぬ天照大神に向かい、乱暴狼藉に及び、結局追放される。伊弉諾尊は寂しく果てられたことであろう。

書紀は、国づくりする両尊の悲劇的な運命を語る。いかに個人の愛情深くとも、国づくりとなれば、かくも過酷な運命を引き受けねばならぬものであることを伝えようとしている。書紀を読むかぎりにおいて、くにづくりの使命を受けた伊弉諾尊と伊弉冉尊が夫婦として、親として落ち込まざるをえなかった苦しみに、哀しみと思慕の情を禁じえまい。子孫にその思いを伝えんとする書である。

古事記にこそ日本精神があるとをみた国学者の見解はいささかも狭い。書紀の精神にも足を踏み入れるべきと一筆す。

平成 16 年 5 月 22 日 小泉首相平壤訪問の日